

東京芸術劇場コンサートオペラ vol.2

# 6.ヴェルディ 歌劇「ドン・カルロス」

# DON CARLOS

*Giuseppe Verdi 9 Version Paris on 5 actes*

パリ初演版・フランス語全5幕〔日本初演〕演奏合形式

2014年9月6日(土) コンサートホール

指揮:佐藤正浩

出演:フィリップ2世:C.コロンバーラ/ドン・カルロス:佐野成宏/ロドリグ:堀内康雄/  
宗教裁判長:妻屋秀和/エリザベート:浜田理恵/エポリ公女:小山由美/  
修道士:ジョン・ハオ/ティボー:鷲尾麻衣/天の声:佐藤美枝子/  
レルマ伯爵:G.ゴージェ

管弦楽:ザ・オペラ・バンド(在京プロオケメンバーで結成)

コーラス:武蔵野音楽大学(合唱指揮:横山修司)

主催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団) 助成:平成26年度 文化庁 劇場・音楽堂等活性化事業



撮影: Hikaru ★

## ステージと客席を共に支配した「集中力」

この日、舞台と客席を共に支配する空気があった。それは「本物の集中力」である。休憩を含めて四時間もかかり、衣裳も装置も無しでの演奏会形式上演であったのに、場内の緊張感途切れず、演奏者はヴェルディの音楽に没頭、聴衆もオペラの境地に浸り切っていた。

今回の公演は、現在一般的なイタリア語訳詞&改訂稿の《ドン・カルロ》ではなくて、オリジナルのフランス語による《ドン・カルロス》パリ初演版日本初披露という斬新な企画である。第2幕の女声合唱のそよ風のような爽やかさなど訳詞では味わえぬ境地であり、第4幕の哀歌を思わせるアンサンブルも現行版では聴けない一曲。客席が初めて聴くページも多かったに違いない。それでも終演後は喝采の嵐になり、舞台上では全員が満面の笑みを浮かべていた。それにしても、こんなに客席のノイズが少なかった舞台ってあったらどうか? オペラに長年親しむ筆者には、そのこともまた、演奏の充実ぶりを物語る証になった。

本作では、実在の王子とは違う「理想のカルロス像」が展開する。元の婚約者で今は義母の王妃への思いを封印し、斃れた友との約束を果たすため、新教徒を解放すべく旅立とうとする彼の姿を通じて、演じる側も聴く側も、当時の社会的な重圧を目の当たりにするのである。だから、

エリザベート(浜田理恵)が結婚を承諾する(Oui はい)の一言は猛烈な悲愴感を帯び、エポリ(小山由美)が驕慢な自分を恥じて叫ぶ一節も凄絶に響き、宗教裁判長(妻屋秀和)が頑迷な態度を超低音「五線譜下のE」に象徴させると、国王(カルロ・コロンバーラ)が轟音の怒声で「坊主よ、黙れ!」と一喝。剣を振り上げたカルロス王子をロドリグ(堀内康雄)が一世一代の大音声で諷めると、当の王子(佐野成宏)は驚き、悄然として「君か?」と呟く。こうした一瞬の真実味が次々と積み重なったからこそ、聴衆の心もドラマの世界と直結し、共鳴したのだろう。

ここで指揮の佐藤正浩に敬意を表しておこう。海外で本作に携わった経験も活かして、彼は並外れた熱意のもとオーケストラ(ザ・オペラ・バンド)と歌手勢を牽引。長身から繰り出す雄弁な棒捌きで緊迫感に富む響きをもたらした。そして、「縁の下の力持ち」の武蔵野音楽大学合唱団(合唱指揮:横山修司)にも拍手を。みな若い世代ながら歌の精度が著しく、入退場のスムーズな流れから起立の一瞬まで、限られた動きの一つひとつでドラマの力を倍増させていた。

文:岸 純信(オペラ研究者)



## 古楽ラボ vol.2 聴いて、学んで、演奏して!

~現代の楽器を使って古楽にチャレンジ!~

- 講師:クラシカル・プレイヤーズ東京 有田正広(指揮・監修)、小野萬里(ヴァイオリン)、前田りり子(フルート) ほか
- 期間:2015年1/11(日)、18(日)、2/1(日)、7(土)、8(日)
- 応募方法等詳細は東京芸術劇場ウェブサイトをご覧ください。www.geigeki.jp
- お問合せ:事業第一係 03-5391-2114



## 昨年度初開催し、好評を得た「古楽ラボ」第2弾!現代の楽器を用いて、作曲した当時の演奏にチャレンジ!

古楽ラボでは、クラシカル・プレイヤーズ東京のメンバーが指導を行い、楽曲を実際に演奏することで体験的に古楽をひも解きます。今年の課題曲は、ハイドンの交響曲第83番「めんどり」。全5回の連続講座の最後

には、発表ミニコンサートも開催! 普段はなかなか演奏する機会のないこの時代の音楽を、みんなで聴いて、学んで、演奏してみませんか?